

こどもの話を聞く

2004.06.02

4月から新しい生活がはじまった子どもたちも多いことでしょう。5月の外来はちょっとした症状と新しい場からのストレスとをつなげて心配なさる保護者の方が多くいらっしゃいました。4月から5月にかけて、ウイルス性の胃腸炎が函館市内近郊で流行していましたが、吐いて下痢をしているのは自家中毒（ストレスが原因と育児書に書いてあることが多いですね）と結びついちゃったのかも知れません。こどもの世界もストレスが多くなっていますが、自家中毒なんて気にしなくていいよと难道説明したことが。

でもなかにはちょっと心配なお子さんも混じっています。ある日こんな男の子が外来にやってきました。4月から幼稚園に入ったKくんは、4月は何とか幼稚園に通えたのですが、5月の連休のあと、目をぴくぴくさせることが多くなりました。そのうち、流行っている胃腸炎にかかってとうとう嘔吐。お母さんはまだ3歳なのに幼稚園にやったあなたが悪いのではないかと周りに言われたと、涙ぐんでいました。点滴をして終わったときには元気な顔。いっぱい話したそうな顔をしているので、相づちを入れながら話を聞いてあげると時間を忘れて話してしまいそうな勢い。お母さんは不思議そうな顔をして「こんなにお話しする子だったんですね・・・」

話を聞いてもらえたと最初に実感するのは相手のいった言葉に「ね」をつけてそのまま返すことだと、カウンセリングの教科書に書いてあるのを思い出して、やってみたのですが、K君にはそれがとても心地よかったのかもしれない。お母さんも下の子に手がとられてついつい話を聞いてあげるのをおろそかにしていたのかもといっておられました。K君、お母さんに幼稚園のことたくさん伝えたかったですね。

大人の世界では話をしてスッキリするのはよく経験すると思います。こどもも同じです。こどもの生活の中であったことを上手に相づちを入れて聞いてあげてください。言葉の中にお子さんのたくましい成長ぶりがきくと感じられるはずですから。